

〈実践報告〉

美術教育の今 変わらないもの 変わりゆくもの

松 山 明

1. はじめに

昭和51年4月に大阪市立中学校の美術科教諭として採用され、教員生活を始めることになった。平成25年3月に定年退職するまで37年。その続きを縁あって大阪芸術大学で続けさせていただいている。令和4年6月に大阪市立中学校教育研究会美術部第3ブロックの責任者から一本の電話をいただいた。内容は大阪市立中学校の美術科の先生たちに美術教育のこれからについて、元気の出るお話をという依頼であった。担当者の一人は私の最終年、平成24年11月に開催された「第63回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会・大阪大会」の運営スタッフ。もう一人は平成22年採用で美術教育・自主研修会に参加した教諭だった。9月2日の第3ブロック研修会の講師を快諾した。今回の依頼により改めて美術教育の変遷とこれからの考えるにあたり、これまでの美術教育の流れをもう一度確認して、学びの質を高める教育課程の編成に活かしたいと考えている。

2. 影響を受けた「文部省教育課程実施状況調査研究協力校」の取り組み

美術教育の研究活動を本格的に始めたのは、初任校A中学校の5年目からである。着任時は荒廃していた学校も一定の落ち着きを取り戻した。A中学校は昭和50年5月14日に非常事態宣言が出され学校、家庭、地域の協力で学校再生に動き出した学校である。学校再生を大きく進めたのは、授業研究と学校行事の見直しであった。新規採用者が多く授業研究を頻繁に行い、各教科の授業力向上のために大阪市教育委員会の指導主事を要請して、本格的な授業研究を学校総体で実施する体制がつけられた。その時にご指導いただいた指導主事のY先生には美術科指導の基本を教えていただいたと感謝している。そして美術教育研究への興味をより深めたのは、隣接校S中学校「文部省教育課程実施状況調査研究協力校」の取り組みである。

S中学校の研究主題は「美術教育の基本構造」である。特に参考になったのは(a)学習指導の目標を明確にしていく。(b)指導内容を要素化し系統的に配列する。(c)抽出された要素を題材化する。(d)学習過程で個々の生徒の習熟度が明確になる評価を考える。(e)指導と評価が一体となった学習構造を確立することであった。ただ漠然と領域・分野にたよって絵を描かせたり、デザインの題材を探すことによって、創造性や豊かな情操といった美術教育の基本的な目標が自然と得られるだろうという期待ではなく、美術教育の基本的な目標を構成

していると考えられる造形上の要素や、情意面での発達のために必要と思われる体験を得るためにふさわしい題材を、領域分野にとらわれず設定していく発想である。

具体的な取り組みとして、授業規律の構築のために参考にさせていただいたのは、美術科の題材の制作過程・活動過程の明確化のための10段階ステップ。それによる自己進捗と毎時間の授業態度の自己評価の記録である。題材の開始時に配布する美術科指導プリントは、指導者が生徒に対して美術科のねらいを明確にすること、生徒には題材における準備物や制作順序を伝えることで学びの心構えができること、等の利点がある。また、自己進捗評価の記録カードは、各週における自分の授業態度を自己評価させることで、自律的な学習態度の形成に役立つものである。この各題材における取り組みは2校目のT中学校での実践につながりさらに進展していった。

3. T中学校の美術科指導

T中学校では、美術科の指導がどうあるべきか、子ども像の策定から教科指導の重点、指導方針の重点、具体的な取り組みを通した美術科の系統的な指導を考える取り組みに発展していった。(1) 子ども像は創造性豊かに自己表現できる子ども。自然および造形作品の美しさを感じ取ることのできる子ども。(2) 教科指導の重点は美術に対する関心と態度を育成し、基礎的表現力の充実を図る。A. 創造活動に必要な基礎的表現力を養う。B. 美術の表現や鑑賞を通して、自然や造形作品の美しさに気づかせる。C. 自由表現の幅を広げ、生徒個々の創造性を養う。D. 各題材のねらいを明確にし、よりよい評価のあり方について考える。(3) 指導方針の重点 T中学校の実態を考えて A. 意欲的に自己表現させる。(積極的な表現姿勢) B. 最後まで集中して制作させる。(集中力、根気、創意工夫) C. 完成のよろこびを味わわせる。(成就感、探求心、計画性) D. 自分の作品やみんなの作品を見つめ直させる。(鑑賞力の向上) E. 用具、備品を大切にし、後片付けをきっちりとさせる。(環境整備、物を大切にする心) 教科指導の具体的な取り組みとしては、美術科指導プリント、美術科自己進捗評価の記録に加えて、題材の終了時に記入する美術科学習の記録(美術科学習のまとめ)には10段階の各項目の目標に対する自己評価の記録と、感想や工夫点を記入させる。また、公募展への出品と校内の作品展示。後片付けの徹底、毎時間の始業時の5分間クロッキーなどの取り組みによって基礎的表現力の育成に努めた。

4. 平成4年度大阪市立中学校教育課程研究協議会資料から見る美術科の目標と課題

平成3年度より大阪市教育委員会事務局指導部中学校教育課中学校教育係の指導主事となった私は、文部省の伝達講習会受講のために東京代々木研修センターでの研修会に参加し、教育課程研修会・指導主事会議で担当地区の実践発表を行うと共に、遠藤友麗教科調査官から「これからの美術教育のあり方」についてお話を伺った。そして、その受講内容を整理して、所管の地域である大阪市立中学校の美術科教員への伝達講習を行った。

平成4年度(1992年度)大阪市中学校教育課程研究協議会資料 [美術科]

I. 改訂の趣旨と要点

ア. 学習指導要領改訂の基本的な考え方 表現及び鑑賞の活動を通して

- ・豊かな感性・創造性の基盤となる直観力や想像力
- ・創造的な技能、感覚 及び主体的な鑑賞力 ⇒ 豊かな情操を育てる

☆ 美術の教育機能 ⇒ 情操・創造性・表現活動

- (1) 情操教育・(感性や豊かな情操を養う教育) 感受・熟成能力の育成と情緒の安定
- (2) 創造性教育・(直観力, 想像力, 発想力, 観察力を育てる教育) 創造的能力・態度の育成
- (3) 表現教育・(自由な表現力を育てる教育) 表現と伝達、認識能力、態度の育成

☆ 趣旨の要約

- ① よさや美しさなどを、感じ取る感性を深め、豊かな情操を養う。
- ② 創造性の基盤となる美的直観力や想像力を養い、豊かな発想力や構想力を育てる。
- ③ 表現制作の創造的な技能や感覚を高め、個性を伸ばす。
- ④ 主体的に鑑賞する能力を育てる。

イ. 教科の目標の要点 表現の活動、鑑賞の活動を通して造形的な創造活動の能力を伸ばす。

(能力的目標) 創造の喜びを味わわせる。美術を愛好する心情を育てる。(態度・情意目標) であり、能力・理解、態度・情意の総合的目標は豊かな情操を養うである。

II. 美術教育の重要性と今後の課題

これまでの美術教育の教育課程編成時における授業時間数の減少の背景には、美術教育のあり方が影響を及ぼしているのではないか。例えば、美術は「才能の教科だ」「趣味の教科だ」という考え方が多いのではないか。学校教育の中での美術教育の必要性や教科性の確立が望まれる。また、これからの生涯学習社会における学校教育の必要性を考察すると、「多くの人々に苦手意識を植え付けた」という過去の美術教育の反省点も存在する。

これからの社会は「美・感・遊・創」(美意識、感性、遊び心、創造性)と言われている。その時代に即応した教科性の確立が望まれる。人格形成の基盤となる「美育」、生涯学習の基礎・基本としての創造的能力の育成、生涯にわたって美術を愛好する意欲と態度の高揚などである。そして、美術科の指導と評価の質的転換を研究推進することによって育てたい生徒たちの望ましい姿として、「描ける、作れる、見てわかる。」ことは生涯学習への自信となる。また、発想できるは、創造性の原点である。生活の美的充実を高めるために造形感覚を備えていること。感性・美意識を醸成することは、美醜を見極める力をたかめていく。そして、最後に生涯学習への意欲の原点である、喜びを持ち心の充実を楽しんでいる人を育てることである。

III. 指導計画作成の意義と評価

(1) 指導計画の意義

- ① 生徒に対する学力保障のもとになるもの
- ② 教育目標の具体法則を示すもの

- ③ 学校としての自分の教科の存在明示 ④生徒に対する教師の指導責任の意思表示
- ⑤ 指導内容、身に付けさせたい力等の系統的・発展的位置付けの自覚

(2) 評価について

- ① 生徒が「こうなってほしい」「こういう力を付けてほしい」「こういう姿で取り組んでほしい」というような指導する理由や指導の結果、生徒の成長してほしい姿が「指導の観点」であり「評価の観点」でもある。
- ② 評価は教師の指導の確かめと、今後の指導の改善の根拠になるものである。
- ③ 指導計画には「評価の観点」が「指導の観点・目標」と対になって、設定されていないなければならない。

IV. 鑑賞指導の充実

- ① 生徒一人一人の素直な感じ取り方や考えたことを尊重して、自分の見方・考え方に自信を持たせるとともに、他の人の見方・考え方を尊重し、それを理解することができるようにさせる。
- ② 表現活動との関連性を考え合わせ、鑑賞の対象を生徒作品も含め身近なもの、理解しやすいものなどから内容の程度の高いものへと拡大して鑑賞できるよう工夫する。
- ③ すぐれた視聴覚教材や資料の収集、整備に努め、機器の活用を図り、生徒の興味、関心を引き出したり、生徒の主体的な活動が展開できるような鑑賞学習の工夫に努める。
- ④ 作品名、作者名、時代名などの知識理解に終わらないよう作品鑑賞を重視して、出来るだけ実物作品にふれる機会をつくるなどの工夫をする。
- ⑤ 学校内や日常の生活等の身近な環境のなかに作品を飾ったり、鑑賞する場を設定して生徒の造形的関心や興味が深まるようにする。¹

以上、平成4年度、教育課程研究協議会での配布文書であるが、令和の現在でも十分に適応できる内容である。とりわけ、指導計画作成の意義と評価、鑑賞指導の充実について具体的な指導のあり方が示されている。しかし、中学校の現場では鑑賞教育の取り組みは具体的に広まっていくことは少なかった現実がある。

5. 平成13年度大阪市立中学校教育研究会一斉発表会・講演会記録より

市教委事務局指導部の指導主事4年間の後の6年間は空白の時間があるが、平成13年に管理職として現場に出た私は美術教育の研究活動を再開した。その年大きく印象に残ったのは大阪市立昭和中学校で行われた中学校教育研究会全市一斉研究会・美術部の講演会でお話された、日本美術教育学会、会長の神林恒道先生のお話「美学と美術教育の関わり」である。以下に、大阪大学大学院、神林恒道教授の講演内容の記録を紹介する。

美術教育の核は美学や美術史である。大学生の学力低下が言われている。それは否定できない事実である。私は多く大学に講義に行った。南は沖縄から、北は北海道までである。講

義は美術史で話をすることが多い。各大学での講義は年々やりにくくなっている。その原因の一つは基礎知識の欠如である。今日の大学生の基礎知識の欠如は深刻。たとえばルネサンスを代表する3名をあげよという質問に答えられない学生が多い。答えは①ミケランジェロ ②レオナルド＝ダ＝ヴィンチ ③ラファエロである。さらに私は後期印象派という言葉が嫌いだ。本当は、ポスト印象派、印象派以降、またはアンチ印象派と訳すべきである。ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌなどである。また、日本作家の安井曾太郎、梅原龍三郎、を知らない学生が多い。美術の時間が減少している。このことは大変なことだが、美術の授業は実技偏重になっていないか。私はもっと鑑賞教育が重要であると思う。

昔は外国は遠かった。私たちは泰西名画などと称し、中学校の美術の教科書でしか名画は見られなかった。鑑賞教育について感じることは今の時代、授業で美術の教科書をしっかり使っていないことや、社会の授業で美術（文化）史をおろそかに扱うことが鑑賞軽視の原因になっている。文化史はテストにはできませんではだめである。そういう授業を受けて大学生になっている。美術の実技を重点において「美学」を軽視することはダメである。それがネグレクトし悪循環となる。中学校の美術の授業で美術史が少なく実技に傾き過ぎている。この美術の授業を変えなくてはいけない。自由な創造と言って授業を進めすぎではないか。

自由な創造性だけを重視することは、戦前の美術教育の反動である。子どもの表現を広げるためには、いろんな絵をみせることが大切である。ただ自由奔放に書かせる事がよいことではない。何に感動しているのか、何を表現しようとしているのか。そのためにも美術教育が必要になってくる。本物を見ることや、実地教育が大切である。絶対に子どもが嫌いになる美術教育はしないでほしい。何をやっているかわからない、実技偏重の美術教育はしないでほしい。絵を描くのが嫌いであるが、絵を見るのが好きという子どもを育ててほしい。日本の文化や芸術の底辺を担うことのできる人を育ててほしい。²

平成13年度の全市一斉研究発表会、美術部の講演内容である。中学校教育研究会・美術部の運営委員が研究会の講演としてお願いした講演会である。美術の授業が実技偏重になり、従前より叫ばれている、鑑賞教育の充実と発展を願って招聘した神林先生のお話である。

さらに4年後の平成17(2005)年6月20日の新聞紙上で神林恒道先生に出会った。次にその記事「実技偏重の美術教育 — サポーターがいてこそその傑作」を紹介する。

「ゆとり教育」への批判がしきりである。知育偏重への反省ならば、その時間は情操教育に向けられるべきだったろう。ところが、ゆとりを生むための時間削減のしわよせは、美術や音楽の時間にまで及んでいる。いま、美術教育の現場では、この限られた時間内で「表現」と「鑑賞」の学習のいずれに重点をおくべきかの選択に迫られている。この現状を前にして、美術教育にたずさわる者の立場から、改めて反省しなければならない問題がある。それはこれまで「美術教育」と称しながら、実はわれわれは小中高の教育を通じて、子ども達に「美術を嫌いにする教育」を行ってきたのではないかという反省である。みんなで一緒に絵を描

くのが楽しくて仕方がないというのは、低学年までだ。高学年ともなれば、絵を描くのが得意な子とそうでない子の違いが出てくる。これは音楽や体育の時間でも同じだろう。確かに絵を描くのは得意ではない。だが素晴らしい絵を見ることは好きだという子も少なくない。ところがこれをフォローする、つまり描く楽しみとは別な、見る楽しみを教えてくれる「美術教育」がなされてきたらどうか。その結果、アーティスト志望以外の大半の学生は、美術はつまらんものだとすり込まれて大学に進学してくる。そうした学生を相手に数年来、美学、美術史の講義をやっている。ところが教室はいつも満杯である。彼らは「美術」が嫌いなのではなく、描かされるだけの美術の時間が嫌いなだけだったのだ。こんな美術教育なら、やってもらわない方がいい方がありました。文部科学省もようやく鑑賞教育の重要性を指導要領に盛り込み、美術館は学校と連携し、出版社も教科書に工夫をこらしている。中学校に進めば美術の教科書も一変する。表紙をめくると、ゴッホの「アルルの跳ね橋」が目飛び込んでくる。これが初めて目にする世界の名画だという子供もいるだろう。その新鮮な驚きとともに、いつ先生がこの絵の話をしてくれるかと期待している。だが、この教材は一ページも開かれないうまま、一年後はゴミ箱に直行というのがおおかたの現実なのだ。これでは税金の無駄遣いというほかない。満足な鑑賞教育ができないのには構造的な原因がある。まず美術教育の現場の教師に鑑賞教育を行うだけの十分な知識と能力が欠けていることだ。実技系の大学には、芸術学の理論関係の科目を軽視する傾向がある。

学生たちは、ひたすら描くこと、つまり技術しか学ぼうとしない。次は美術史担当の先生方が学生に、美術の楽しさを教えるのに役だつ、わかりやすい講義をやらうとしない。教育的配慮に欠けた独善的な講義では、学生たちにそっぽをむかれても仕方がない。そんな学生たちがまた美術の教師となって教壇に立つ。この悪循環を断たないかぎり、周囲でどんなお膳立てをしても問題は解決されない。いま美術教育に望まれるのは、未来の文化や芸術を支え、もり立てていく応援団やサポーターを育成していくことではなかろうか。その教育には、絵描きの実技は必ずしも必須のものとは思わない。職人的絵描きである以前に、まず何よりも人間として美しいものに心を動かし、その感動を子供たちと共有し、語り合うことが出来なければならぬ。そろそろアーティスト本位の美術教育から脱して、日本の文化芸術の将来を見据えた「美術教育」の在り方を、真剣に問い直すべき時期に差しかかっているのではないだろうか。³

以上、神林恒道先生のお考えに触れることができた。令和4年の現代からさかのぼる17年の前の新聞紙上で「美術教育の今後を憂えた」記事の内容である。

6. 美術教育で育てる学力

教育課程の改訂が行われるたびに美術科の授業時間は減少の傾向にある。今の美術の先生が置かれている状況は平成29年3月31日に告示された現行の学習指導要領以前より続いている。大規模校でないかぎり中学校では教科制の中で美術教師が各校1名である。教師1名

に対して準備すべき教材の数は多く、担当する生徒は全学年全クラスである。現状は厳しいものであり、美術科の教師自身が疲れ、悩み、相談相手が学校内にいないことは憂うべき状況であることは確かである。この状況を打破するために美術科の教員が考え進むべき道は美術教育に関わる教師がつながり・集まり・議論して新しい授業づくりを進めることである。平成14年10月美術の情報誌「形」で立教大学の三澤一実教授は次のように述べている。

「変化への対応」は教師にもとめられている。教師自身に自ら考え自ら学ぶ姿勢がなくてはこれからの子どもたちには対応できまい。過去を懐かしむだけでは図工・美術という創造的教科に携わっている価値がない。教師自身が創造性を失ったら子どもに創造性が身につくはずがない。我々美術教育に携わる教師は授業を通して図画工作・美術科の存在価値を広く社会に問い直していくしかないのである。そこで、是非、美術教育に携わっている教師自ら身近に情報交換できる場所をつくってもらいたい。インターネットを利用したネットワークでもよし、美術館や教育センターを核として集まってもよし、隣の小中学校の教師同士でもよい。孤立が教師自身の元気を奪っていく。開かれた学校の下、教師の力量も社会に問われる時代である。教師自身が変わり、その教師が現場を変えていかななくては美術教育の行く末はないような気がするのである。

さて、ではどのような情報交換をしていったらよいのであろうか。私は美術教育で身につけるべき学力について具体的実践をもとに議論してもらいたい。美術教育が社会にとって必要なのかという問いは美術教師の存在まで左右する。ただ単に技術的能力ばかり迫っていても、また、自由な表現と放任をはき離れた授業をしていても国民には支持されないであろう。

これからを生きる子どもたちに必要な力は何か、また力を身につけさせるために美術教育がどのように関わっていくのかという原点から議論をたかめていくことが必要なのである。⁴

私に関わってきた大阪府立中学校教育研究会の研究活動、平成4年の研究協議会の資料、神林恒道先生の平成13年全市一斉研究会の講演会の記録、平成17年の新聞記事、そして三澤一実先生の美術教育へのエールを読んでいくと今後の美術教育のあるべき姿、美術教育関係者がともに努力すべき姿が見えてしっかりと示されている。

7. 「美術科指導法1」のレポートから読み取るこれまでの美術教育

令和4年度「美術科指導法1」の受講生は75名。受講生は2回生が主体で3回生も含んでいる。学科は美術学科、デザイン学科、工芸学科の学生である。前期の後半の6月13日に「あなたが考える美術教育で育てる学力にどのようなものがありますか。また、美術を学ぶとどのような力が身につきますか。」というレポートを課した。レポートのテーマは同じようなことを尋ねているが、前半は教員が行う美術の授業で身につく学力を想定している。後半は、生徒が美術を勉強するとどんな力がつくと考えるか、生徒から見た美術の学習で学ぶ内容はという意味を含めている。

すべての学生が、〇〇力という単語やキーワードで表記していないが、集計すると次のような結果が現れた。美術教育で育てる学力の一番は表現力14、創造力12、感受性7、想像力6、計画性4、鑑賞力3、豊かな心3、プレゼン力3、美的センス2、観察力2、豊かな情操2、多様性を学ぶ1という言葉で表現されたものだった。数字は表記された数である。

次に、美術を学ぶとどのような力が身につくかという質問に対しては、一番はやはり表現力11、次に創造力9、観察力8、感受性6、鑑賞力5、想像力5、コミュニケーション力4、技術力3、自己理解力2、忍耐力2、継続力2、発想力2、好奇心2、審美眼1、社会性1、美術を楽しむ力1などである。このような結果を集計し、現在の学生の考えを読み解き、これからの美術科の授業の方向性を考えた時、学生たちが中学校、高等学校で学んだ美術の授業は描く活動やつくる活動、いわゆる実技偏重の授業が行われており、鑑賞の授業の少なさを実感させる結果につながっていると思わざるをえない。

8. 「中学生が嫌いになる教科」第1位は「美術」

令和2年2月に発刊された、末永幸歩著の『13歳からのアート思考』の冒頭の文章に釘付けになった。この章の文末には小→中の変化に注目するなら、下落幅は全教科のなかで第1位。「美術」はなんと「最も人気をなくす教科」なのです。とある。この段落の文章を紹介する。

突然ですが、あなたは「美術」という教科に対して、どんな印象を持っていますか？大人のみなさんは学生時代を振り返ってみてください。「そもそも絵が下手でなので、あまり好きでなかったです・・・」「美的センスがないんでしょうね。いつも成績が『2』でした」「生きていく上では、役には立たない教科だと思います・・・」教師としては残念ながらぎりですが、多くの人からこのような答えが返ってきます。それにしても、「美術」へのこうした苦手意識は、どこから生まれるのでしょうか？じつのところ、これには明確な分岐点、があるのではないかと、という仮説を私は持っています。その分岐点とは、本書のタイトルにもある「13歳」です。小学校の「図工」は第3位の人気を誇っているのですが、中学校の「美術」になった途端に人気急落しているのが見て取れます。小→中の変化に注目するなら、下落幅は全教科のなかで第1位。「美術」はなんと「最も人気をなくす教科」なのです。

だとすると、「13歳前後」のタイミングで、「美術嫌いの生徒」が急増している可能性は十分に考えられそうです。皆さんにも思い当たることはありませんか？「中学校に入って初めての美術の課題が『自画像』だったんですが、美術部所属の同級生のと比べると、自分の絵がなんとも不格好で弱々しくて、とても恥ずかしい気持ちになりました・・・」「ほかの教科の成績はまずまずだったんですが、いつも美術だけはいまひとつでした。評価基準がよくわからないまま低い評定をつけられたのが嫌でしたね。『自分には美的センスがないんだなあ』と思うしかありませんでした」「期末テスト前になったら、いきなり美術史の授業がはじまって、作品名を丸暗記させられました。あれはなんだったんでしょう」

こうした状況は依然として続いています。私が一教員として学校教育の実態を見てきたか

ぎりでは、絵を描いたりものをつくったりする「技術」と、過去に生み出された芸術作品についての「知識」に重点をおいた授業が、いまだに大半を占めています。「絵を描く」「ものをつくる」「アート作品の知識を得る」— こうした授業スタイルは、一見するとみなさんの創造性を育ててくれそうなものですが、じつのところ、これらはかえって個人の創造性を奪っていきます。このような「技術・知識」偏重型の授業スタイルが、中学以降の「美術」に対する苦手意識の元凶ではないかというわけです。⁵

末永幸歩先生の警告の通り、中学校の美術の授業はおおむねこのような状況で進行しているのではないかと推測できます。美術科教員の一人一人が学習指導要領の教科の目標をよく理解し、各学年の年間指導計画の作成と評価の計画をたて調和のとれた授業実践が展開されることを強く願うところです。

9. 「美術科指導法1」鑑賞シート、他者の作品鑑賞から感じとって学んだこと

今、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）が推奨されている。美術科においては、作品の制作時でも、その後の完成作品の相互鑑賞でも学びを深めることが出来る。「美術科指導法1」の授業で90分の時間をしっかり使って作品を眺め、相互の作品から感じ取ったことを鑑賞シートに記入することで、鑑賞教育のあり方研究を進めている。

鑑賞シート3の項目「他者の作品鑑賞から感じ取って学んだこと」の記入から、作品鑑賞の学びの深まりについて考察したい。

1. 斬新なモチーフでなくても「日本の文様」などを描いている作品は丁寧を感じて良い。
2. どの作品も個性があり鑑賞が楽しかった。工芸科とは違う系統の作品を鑑賞できた。
3. 和をイメージしたものから食べ物などいろいろと見ごたえがあった。
4. 小さい屏風作品なので狭い範囲で細い線などきれいさが目立った。
5. 絵の中に動きが表現されて、参考になる作品ばかりだった。
6. 細かいところまできちんと描かれていて完成度が高かった。
7. 私の作品が実験的な作品だったので、周りの反応が見られて良かったです。
8. 現代風のモチーフが面白いと思った。
9. 色塗りに個性が出て、それぞれの好みや雰囲気が作品に詰まっていた鑑賞が楽しかった。
10. シンメトリーな構図で描かれ、動きと迫力が生み出されていた。
11. パンダとシャチの戦いの構図は面白いと思った。
12. 日本の花や屏風を描いてやはり屏風は日本のモチーフが合うと思った。
13. 細かいディテールまでこだわって良かったです。重ね塗りによる奥行き表現が出来た。
14. 屏風にイラストや食べ物を取り入れた作品から頭を柔らかくして考える大切さを学んだ。
15. ポップな現代風なものもあって、和と現代アートの組合せも面白いと思いました。
16. 成人式を迎えるので母の振袖を屏風に描くところに親への愛情が伝わってくる。
17. シャチとパンダの白と黒が良い動きを出している。

18. 屏風の魅力は広げ方によって見えや奥行きを感じ方が違うのがよく理解できた。
19. 美術学科の皆さんの絵がとても美しく色使いが上手でした。
20. 遠近感をうまく表現している人が多くて、作品に引き込まれた。
21. 奥行きや色使いが工夫されている作品が多くて面白いと思った。
22. 屏風独特の形や色に着目し、屏風のよさを引き立てる作品が多いと思いました。
23. 屏風は平面的なものと考えてしまったが、立体的に表現した作品があったので面白い。
24. 西洋の風景をとりいれているのが斬新で面白いと思った。
25. 風神雷神のオマージュのような作品があり、余白もよく取り入れていると感じた。
26. 余白が多い人、全面に描いている人、表現は多種多様だと感じた。
27. 一番印象的だったのは、書体のみで表現された作品。とても魅力的だと思った。
28. 金屏風を生かして描くという工夫で、金色を光に見立てる発想がすごいと思った。
29. 日本文化であるアニメーションを融合させるという試みがとても面白い。
30. 一人一人の制作意図をもっと聞いてから投票したかったと思った。

以上、代表的な意見を記載したが、今回のシラバスで取り上げた作品制作を通じて、指導と評価を考える「折り曲げて味わう屏風・美のしかけ」は学生からは大変好評であり、表現の仕方や学科によって作品制作の発想や表現方法の違いに刺激を受けたようだ。

相互鑑賞会での意見交換など、今後も授業改善に努めたい。今回、大阪市立中学校教育研究会からの講師依頼を受け、主に中学校の美術教育の振り返りから、これからの美術教育の進む道は明確になった。その第一は気軽に美術について話し合える人を作ること。第二はその語り合い中で美術教育の研究に関心を持ち自信を持つこと。第三に美術教育の実践を深めその成果を発信することである。これからも美術科教諭がつながり一人一人が情熱を持って教材研究を着実に進めることである。今後も学校現場との情報交換を進め、カリキュラム・マネージメントに努力していきたい。

「引用文献」

1. 松山 明 平成4(1992)年9月29日 大阪市立中学校教育課程研究協議会資料
2. 松山 明 平成13(2001)年10月18日 大阪市立中学校教育研究会一斉研究発表会記録
3. 神林 恒道 平成17(2005)年6月20日「実技偏重の美術教育」産経新聞
4. 三澤 一実 平成14(2002)年10月15日 特集 あらためて考えてみよう 美術教育で育つ学力「美術教育で育てる学力」PP. 8-9 形 FORME 日本文教出版
5. 末永 幸歩 令和2(2020)年2月19日「13歳からのアート思考」PP. 8-11 ダイヤモンド社